

私と青い目の学生達

本村
祐子

著 者 紹 介

東京文化学園（中等部、高等部）卒業。

早稲田大学にて独文学を学ぶ。

卒業後、渡英。

日本語教師として活躍。

わたし あお め がくせいたち
私と青い目の学生達

1996年1月30日 第1刷

著 者 本村 祐子（もとむら ゆうこ）

発行者 福澤 英敏

発行所 蠶近代文藝社

〒112 東京都文京区目白台2-13-2

(03)3942-0869 Fax (03)3943-1232

印 刷 信毎書籍印刷株式会社

製 本 小泉製本所

©Yuko Motomura 1996 Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

ISBN 4-7733-5229-9 C0095

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

私と青い目の学生達／目次

日本語クラスの学生達	5
日本語教師になろうかナ	6
日本語教師の職は私に向いていそう	6
チャンス을くださったフアラー氏	8
真っ昼間からお酒を飲む?	9
生まれて初めて教壇に立つ	11
危険な街、ロンドン	14
ドイツでの危機一髪	16

柔道を習う	19
合気道カップル	23
空手のコリン	25
イギリスの旦那様方	27
大和撫子は理想像?	29
イギリスの社交生活	31
いつも御夫婦御同伴	33
バイクとクラシック気違いのスーザン	37
セイジ・オザワのコンサートへ行く	39
コンサートの感想?	41

クラシックからロックへ	42
レオン	45
イブニング・クラスとは？	47
ジェームズとシェン	49
スーパードリッチ（超金持ち）	53
イギリス人と英文法	56
階級意識の強い国	57
日本語を試してみよう	61
大人？の学生	67
イギリスで見る日本映画	70

日本語をなぜ習う？	75
日本料理屋へ行こう	82
礼儀・行儀	91
日本料理屋のウェイターになる	99
日本批判屋、ロイ	103
戦争の傷跡	111
御隠居さん学生	116
日本と中国は同じ？	120
友情・ロマンス	127
最後に	137

私と青い目の学生達

日本語クラスの学生達

『どうして、『私の頭が痛いです』と言わないで、『私は、頭が痛いです』と言うんですか』

『どうして、『私は、頭が痛い』が、あります』と言つては、いけないんですか』

いくら文の構造を説明し、例文を引用しても、英語の文の構造に当てはめようとする学生が一人か二人は、クラスに必ずいる。いくら日本語と英語とは、違うんだーと言つても、どういう訳か受け入れられず、英語式に表現しようとするのだ。

質問する学生には、一生懸命理解しようとしている様子が、はっきり見られる人や、わからなくてイライラし出し、自分がわからないのは、まるで日本語のせいかのように、又は、教師のせいかのように、感情的になり出す人も、中には、たまに居る。

私が教えている日本語クラスの学生達は、二十代から六十代という広い年齢層に渡り、様々な職業を持つ人、或いは無職の人達から成るので、それこそ色々な人間に出くわす。特にロンドンではコスモポリタンな町だから、クラスにはイギリス人のみならず、フランス人、スペイン人、スイス人、イタリア人、遠くは、カナダ人、ナイジェリア人、マレーシア人、ニュージーランド人なども来ていて、国際色豊かだ。

だから、中には、ひょうきんな人や大人しい人も居れば、気むずかしい人や、ぶつくさいう人も居る訳だ。しかし割合から言えば、まあ九割は「いい人達」だ。

日本語を教えていて楽しい事というと、こういった「いい人達」と知り合いになれる事だ。

日本語教師になろうかな

学生の頃、教師になる気など全くなかった私が、ヒョんな事からイギリスに来る事になり、教師になつてしまつた。

ロンドンには、今や、日本人が沢山住んでいるが、英語の堪能な人達は、通訳やガイドや翻訳等の仕事が出る。但し、堪能な人が多いので、競争率はかなり激しいらしい。中には、イギリスの会社で、イギリス人達に混じつて働き、頑張っている人達もいる。

又、何かの資格を得る為にカレッジに通い、英語で授業を受け、英語で試験を受けている人達もいる。英語で、よく授業についていけないと全く感心してしまう。

「英語堪能」と言えない人達は、日本の会社に勤める手があると思う。ロンドンには、沢山、日本の会社があるのだ。しかし、私には九時から五時迄の会社勤めは、どうしても辛い事のように思われて、つい、ちゅうちょしてしまう。

そんな私の前に、日本語を教える機会が、現れたのだ。

日本語教師の職は私に向いていそう

日本語を教え始めて、もう八年余になる。

飽きつぱく、怠け者の私にとっては、たとえパートの仕事とはいえ、長続きしている。勿論、仕事でお金をもらっている以上、ラクな筈はない。嫌な学生も少数とはいえ居るし、クラスは夜開かれるので、寒さの厳しい冬の夜、仕事に出て行くのは辛い。

又、日本語を教えるのは、日本人なら誰でも出来そうでいて、これが結構、難しいのだ。

特に、日本語の国家試験を受けるという学生には、やはり重い責任感を感じてしまう。正直言つて、「ああ、もうやめたい」と思つた事が、何度かある。仕事に行くのが嫌で、心臓が、おもゝく感じられた事もある。

しかし、結局思いとどまつたのは、前にも書いたように、クラスの「いい人達」と、知り合いになり、おしゃべりするのが楽しいからだ。

私は、格別、社交的な人間だとは思わないのだが、「人間」に大変興味を持っている。新しい人に出会ふと、すぐ、「どんな人かしら」と好奇心を燃やしてしまう。小学生の頃、クラスに新しく女の子が転校して入って来ると、「どんな子だろう」と好奇心満々、真つ先に話しかけて友達になつたのは、私だった。中学でも高校でも、そうだった。中学生の時、近所にアメリカ人の家族が住んでいて、その私と同一年位の女の子に話しかけてくたさうな仕方がなかったが、ついに勇気が出なかった。

このような私の人に対する興味、好奇心、そして人間好きは、「クラスに新しく入つて来た子」から世界の国々の人達に向けられて行つたようだ。

「色々な国を訪れたい」

「色々な国の人とお友達になりたい」

という夢を持ち続けながらも、現実はずいぶん、私は、実を言つと、ヨーロッパ数ヶ国をカケ足

で旅行したに過ぎない。学生時代あれ程行きかったアメリカには、まだ行った事がないのだ。

しかし、今や、一所に居て、色々な国の人達と知り合う事が出来るようになった。

日本語を教えるようになってから……。

チャンスをごさつたフアラー氏

日本語を教えるチャンスを、私に初めてくださったのは、フアラー氏だといえる。フアラー氏は、或るカレッジの成人教育部の部長先生である。それは、もう八年余も前の事なので、面接がどんな風だったかは、もうよく覚えていないが、その面接前の事は、よく覚えている。

私が指定時間である午後一時よりちょっと前にカレッジに着くと、秘書が「フアラー氏は、少し遅れるそうです」と言う。結局二十分程、待たされただろうか。ドアが開いて、赤ら顔の丸顔で、髪毛の薄くなった中年男性が入って来た。私が、あいさつしようとして立ち上がると、彼、私より背が低い。私は身長百六十センチ。イギリス人の男性で、私より背が低いとなると、よっぽど低い方だ。後に手に入れた情報によると、フアラー氏は、ワイフの方が背が高く、ハイティーンの娘二人の内、一人は、ワイフ似らしく、スラツと背が高く、もう一人は、彼同様、小さいのだそうだ。フアラー氏は、大豆みたいに小さくて真ん丸い顔をニコニコさせて、遅れた事を詫びられた。人の良い「オツチャン」という感じである。握手したら、プーンと、お酒の匂いがした。

「ハハーン。これは、お昼に、ビールかワインを、お飲みになったな」と推測。

どうりで、氏の顔が赤らんでいる訳だ。なんだか、とても人間的な感じで、氏の人の良さそうな

顔に加えて、私は、すぐさま、氏に好感、親近感を覚えた。

真つ昼間からお酒を飲む？

日本人の社会では、「昼間つから、お酒の匂いをさせて、マァー」と、眉をひそめる方が多いと思う。しかし、イギリスのビジネスマンの間では、それは、ちつともかまわないらしい。

かつて、イギリスの地方に住んでいた事がある。地方といっても、一応、工業地帯ではあったので、日本の会社と取り引きのあるところも少しはあつて、通訳を頼まれる事が、時々あった。通訳は、私は下手で苦手だったが、日本人が私の他に殆ど住んでいないような所だったので、つい私の所にまわつて来たのだ。

私のやつた通訳の仕事というのは、殆どが工場見学で、ややこしい機械の説明だの、契約更新の際の話し合いだのと、難しくて責任の重い内容のものが多く、仕事が終わった時には、大抵、頭痛がしてクタクタになったものだ。

しかし、そういった仕事の間でも、少し息抜きの出来る時間がある。それは、昼食の時間だ。イギリス人側は、大抵の場合、最高級とまではいかなくても、かなり高級なレストランに日本人側のビジネスマンを連れて行く。そして、そんな時の昼食には、日本人の感覚からすれば、たつぷり過ぎる程の時間をとるのだ。レストランに着くと、すぐテーブルについて食べるのかと思つていゝと、そうではなく、先ずレストラン内のバーに連れて行かれる。バーと言っても大抵バーテンが一人居るだけで、そこで飲み物を注文し、飲みながら談笑する訳だ。

「食前酒に、何を召しあがりますか」

ときかれて、昼間からお酒を飲む事に慣れていない———というか、それは不謹慎な事と思つてゐる日本人側の中には、

「イヤ、ケツコウです」

と言つて、すぐさま辞退する人もいれば、

「昼間つばからお酒飲むの」

と少々あきれながらも、

「ジャー」

と言つて、お付き合いで飲む人もいる。

イギリス人側は、勿論、何の躊躇もなしに、飲む。おかわりをする人もいる。食前酒を、特にイギリス人側が楽しんだあと、いよいよ昼食になる。昼御飯と言つても招待である以上、フルコースの豪華版だ。そして、食事に必ず伴うのがワインだ。食べる物によつて赤ぶどう酒だの白ぶどう酒だのとうるさい。食前酒にしたつて、シェリー酒やジン、マティーニ等を飲む人が多い中で、ウイスキーなどを注文したら、

「何も知らない田舎者」と内心、バカにされかねないらしいのだ。つまり、ウイスキーは、舌の感覚を鈍くするから、食前に飲むと、後で食べる料理を十分に味わう事が出来ない———という訳だ。ウルサイ事だ。

イギリス人のビジネスマン達は、招待客と一緒に昼食時には、ワインを平気でグラスで三杯位、軽く飲んでしまう（食後、車を運転しなければならぬ人は、別だが）。こういう風だから、フアラー氏のように、午後、赤ら顔をして、お酒の匂いをプンプンさせながら面接する———という事

態も起こる訳だ。

生まれて初めて教壇に立つ

おいしい昼食とお酒のお蔭で、フアラ―氏、御気嫌が良かったのかどうかは知らないが、面接はうまく行つて、いよいよ授業開始の運びとなつた。以前、一人か二人を相手に、日本語の個人教授をした事はあつたが、教壇に立つて教える事は生まれて初めて。授業開始の前の晩はドキドキしっぱなし。

「とんでもない事になつてしまつたと、後悔。

そして、次の日、いよいよ教室内に入つて学生達の眼が、いつせいに私に向けられた時には、ドキドキどころか、ドッキンドッキンで、口から出る言葉は、シドロモドロ。すっかり、あがつてしまい、手が震えてしまつた程だつた。

フアラ―氏の考えでは、せいぜい六、七人も学生が集まれば上出来、というところだつたらしいが、十二名程も集まつたので、ニコニコ顔で、喜んでいらした。何しろ日本語という珍しい語学教室を初めて設置した訳で、どんな運びになるか、フアラ―氏としても興味あるところだつたに違いない。その時の学生達を、今でもよく覚えてゐる。

日本語を習おうとする人達は、「仕事で日本に行く必要がある」

とか、

「日本の会社と取り引きがある」

というビジネスマンが殆どだろう——と私は予想していたが、そういった人達は、イギリスにある日本系の会社に勤めているという会社員が、二人だけで、他は皆、

「日本の文化に興味があつて、日本にいつか、行つてみたい」といふような人達だつた。

何回かレッスンを重ねていく内に、私も少しずつ気分的にゆとりが出来てきて、学生達を観察出来るようになってきた。気分的なユトリ、といへば、私よりも学生達の方が、先にリラックスし始めていたように思える。最初の授業の時から冗談をとばす人が居たし、授業が住むと、ニコニコしながら、

「グッドナイト」

とか

「サンキュー」

とか言いながら帰つて行く。

そんな学生達の中に一人、大変しゃちほこばつたような学生がいた。帰る時は、いつもニコリともせず、しかし丁寧な

「サンキュー・ベリマツチ」

と、あいさつして行く。授業中は大人しく、まじめで目立たなかつた。四十七、八の年齢だつたろうか。

或る夜、帰りしなに私が、

「大分寒くなりましたね」

と言ったら、話しかけられると思っていなかったのか、びっくりした風で、あわてて、

「イエス」

と、一言、言ったのを覚えている。

そのビルという名の学生が、数週間の内にすっかり変わって———というか、地が出た———というのか、授業中におもしろおかしい事をしょっちゅう言つては、他の学生達を笑わすようになった。例えばだ。

日本語で、

「あなたは、どこへ遊びに行きたいですか」

と、教師の私に質問されて、ビルは、

「私は、ヨシワラへ、遊びに行きたいです」

と、英語っぽい発音でスマシて答える。

ちよつとアツケにとられた後で、笑い出した私を見て、他の学生達は、

「どうした、どうした」

という風に、説明を求める。

そこで、ビルは、どこで、どうやって調べたのか、「ヨシワラとは何ぞ」について、詳しく説明し始める———という次第だ。

こうして、謹厳実直という感じだった学生から、ビルは、ひょうきんな、クラスの人気者になった。

危険な街、ロンドン

ロンドンには、ニューヨーク程ではないにしろ、かつぱらいが多く、又、女性の夜の一人歩きは危ない。日本なら、東京でも、女性一人で夜、地下鉄に平気で乗る事が出来る。しかし、ロンドンの地下鉄は、「まあ、大丈夫だろ」とは思いながらも、空いている車内や、静かなプラットホーム、階段などを歩いている時など、耳を澄まし、目をアチコチに走らせて——と、神経質になってしまふ。やはり日本語を教えている日本女性の知り合いが、或る夜、授業を終えてバス停でバスを待っていると、若い男女が近づいて来て、「金をよこせ」と言う。そこで彼女は、

「私は、貧乏な教師に過ぎませんから、お金は持っていないせん」

と答えたそうだ。

すると、若い女の方が男に、

「こんな貧乏くさい中国女を放って置きなよ」

とか言つて、立ち去つたそうである。すぐそばに、イギリス人の男性が、やはりバスを待つて居たそうだが、ずっと知らん顔をしていたそうだ。だからと言つて、彼を非難する事は出来ない。勇気を奮つて助けに出ようものなら、ナイフでひと刺し——という目に会う可能性が大いにあるからだ。

私の学生の一人に、いつもいつも、プラスチックの買物袋を下げて歩いている中年のオバサマがいる。シャレタ柄とかスマートなデザインの袋といったものでなく、スーパの名前などがビツタ